



海峽子心

四上

信
528
4止





〇正岡高森氏長子寂常本肥後國河原孫大官
 上系の丹阿蘇村と高森
 高森の孫として紀伊
 小生れ画とて業中に入佛宗小印
 一初作と寛文の頃より系傳小印
 以流河の舟中より泉涌寺東迎院と相
 見しと表紙と述小沈之感とて去
 居とて一と傍れとある小印とて
 寛藏の形と案とて好はち通
 町と居とても専ら画則と絶
 今とてと大和商取候の指と

明くも半され終らぬとて一も此の如くも
遠くも一もいふ言ふも中程も一も一
えん終ると終て曰れんも承けの中も
と進やも小忽癒息し終るも一人は
うん大も言ふ行も又も中程もこの明くも
靈元上は仙洞も入層の社も遠らせられん
りもあも古像も求るせ終るも一も
乃係河藤も傳来也も多し一も甚
懺也もして終多金及び平所も宅
の祖も先せられ別時人をもておとす

己貴命の家の辰輜とす終る法眼も
且和歌も著也 敵國も達しられ某郷
の傳来も一も自縁もすも多し一も
物も思ふも一も東宗も序の号も揚るも
々も書成りも久し凡生涯も兼奉り
ていもも不祀もして多し一も
葉もして多し一も因も多し一も
以らりもして世に寶永候様も
やも葉も製りて病者も祀りて
業も宗も一も七句も有條も一も病も一も自怨

ぞとつと大少常く是也世代百は名他と
己山をこしりくは名大少少少の世所夫
以物とたせり果しく女流少少の世は
のら名少の世りこれのまゝか女少の世り
りりり海軍少りきり

あふららるる名少の和ちをり
微の解修くあや世少の世少の世
化く名少の世り名少の世り
由流名と今少一人の男少少の世と解少
の世は名少の世り少の世り少の世り

後少の世り少の世り少の世り
少の世り少の世り少の世り
少の世り少の世り少の世り

朝か名少の世り少の世り
白の少の世り少の世り少の世り
あや名少の世り少の世り少の世り
あや名少の世り少の世り少の世り
あや名少の世り少の世り少の世り
あや名少の世り少の世り少の世り

少の世り少の世り少の世り

たゞそれとも乃を重なる所なり
此中未逸と云ふ

○釋照什字の南宮の事也号は信性法未
〜〜〜書とて初を為久温洞恭黙と云ふ
沈雷之竟又之愛外年石見國宮永正小生
り穉名猶之各々了彼小乳と離るる事
研と也〜〜〜字面と云ふ小願方紙有
又深吉古武忠綱今河原小作端成河原
得記伝一重師之長男也長不局小信達
と扱合と云長〜〜〜信若と云は信小也

さ〜〜〜名、あ〜〜〜未故田所ハ孫合〜〜〜不
測の害小ハ小是竟文九己酉の年三月廿四日
初ハ津原津原長門小所字七歳ハ信長長孫
津國芥川の澤〜〜〜後継言と云ハ所九歳
豊長系所と云ハ所〜〜〜信人〜〜〜
類〜〜〜も〜〜〜豊長〜〜〜小作
て級儼の、ち小人〜〜〜信田と云ふ所今
は信小と云ふと云ふ大と哉と云ふの仇と云ふ
〜〜〜事と云ふ怨と云ふ悲と云ふ〜〜〜信知
也〜〜〜目見〜〜〜士夫乃ハ水〜〜〜慶と云

自、紙味、
小正、推、
物、使、
抗、
光、

六、
之、
之、

今、
八、
源、
四、
我、
聖、
四、
法、
限、
年、

中より左に附状より入紙是下我々
臣下了字可経候事

七月六日

光國

法眼之為送作

此の紙は中宮の御筆に
ちりきり

道體益山法橋、雪馳遊怒、
系印作借、以之去新寫、
込運、与尔存、以思、
半推、此、高、分、元、中、
為、之、方、如、未、以、
資、經

以差進下中、以高期、
他、日、也、好、首

八月十日

光國

遍照之院

象集和而

祝在下

宝永丁亥四月六日又命り、
原未百石と揚、
祭記の用と、
織慶寺、
正月十日系、
し、外、沈、

東林院再造（教團の）山門の沈没と云々
と殿少と云々小廟社と頼慶小（小）加不依
経乃志と記し又経乃と云々（小）事係経乃
殿六月十九日寺社（小）出法深彦（小）英金と云
いと命と云々（小）金取と云々（小）及後
の料と云々（小）子母の（小）願條と云々（小）後終
の用と云々（小）終光（小）願社全善と云々（小）
壬子年又経乃と云々深恩と謝しと新西醫
深業の経乃と云々（小）願社全善と云々（小）候毎
と指しと云々（小）願社全善と云々（小）始候の

芳乃及んや（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）
と物と云々（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）
後從（小）梅（小）博（小）士（小）川（小）肥（小）和（小）と細（小）乃（小）比（小）と（小）と（小）
け地と云々（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）
是と云々（小）和（小）乃（小）其（小）記（小）と云々（小）六月十日物と
は事と云々（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）
と云々（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）
池満山の鳥と云々（小）及んや（小）及んや（小）
の去又と云々（小）及んや（小）及んや（小）
と云々（小）及んや（小）及んや（小）及んや（小）

又右名の券... 信紙と申、大甲字三州...
朗休集... 常々人... 徹と... 活... のか... 罹人... 病... 傷... 所命...

一日後... 教... 小...

陰... 晴... 春...

天...

君... 不... 左... 一... 今... 之...

移と稱し終る獨存して叙を嘉祿七十四元文
元丙辰歲十月十日午時之附生匠之帝の恩初と
系り此形と稱し多し數及多ゆふりし系
治平九年四月大君の院遷と云明之月々雲客
又と系以下國之世後後下の方内係系作之
る代稱し不候候の書りし系此年未るの
名日必若かりしり附世の記して日保の年
業と勤實列しゆれば之夜と著て治平九年
の辰乃れハ院元をさるしりふしりふしと致
りし甲乙と云きしり勿や言られしやゆふ

の納府り不引し准し院一其院の書り書り知て
しゆと書らふありしもの勅りれば此年ハ院とて
毎と撰りて傳りし書り院の書り院つしゆの
揚書りし書り文と丹克己院一冊ハ系法此院大
通り院の書り書り院一冊の華清息一冊此院
又竹橋院の書り院の書り院の書り院の書り

山相系 女衣治志 上堂日奇二子
以城島 客指蓬春 日喜 聖別 寓は系
只期 林達 興系

標本從來少多量 山僧何幸^{カレ} 俗徒
大塊假我^ニ 椽椽^ノ 代^ニ 償^シ 堪^ル 為^ス 椽^ノ 梁^ニ
附^ル 松下^ノ 物^ノ 種^ノ 量^ノ 長^ク 難^ク 有^ル 母^ノ 承^ノ 難^ク 也^ニ 南^ノ 宮^ノ の 見^ル
父^ノ 思^ハ 法^ノ 法^ノ 乃^ニ 富^ク 指^ス 一^ニ 年^ノ 八^ノ 生^ル 毒^ノ 未^ク
以^テ 可^ク 的^ク 年^ノ 十^ニ 歲^ノ 之^レ 欲^ス 今^ノ 生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス
生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス 一^ニ 年^ノ 十^ニ 歲^ノ 之^レ 欲^ス 今^ノ 生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス

我^ノ 友^ノ 友^ノ 武^ノ 部^ノ 痛^ク 同^ク 年^ノ 月^ノ 八^ノ 生^ル 敢^テ 之^レ 去^ル
先^ノ 年^ノ 教^ノ 久^ク 矣^ニ 抑^ス 悻^ク 助^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク
如^ク 春^ノ 白^ク 雪^ノ 封^ル 而^シ 國^ノ 之^レ 道^ノ 長^ク 矣^ニ 孰^シ 早^ク
回^ル 舟^ノ 活^ク 如^ク 服^ス 抑^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク 抑^ス 一^ニ 年^ノ 十^ニ 歲^ノ 之^レ 欲^ス 今^ノ 生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス

長^ク 矣^ニ 抑^ス 悻^ク 助^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク
如^ク 春^ノ 白^ク 雪^ノ 封^ル 而^シ 國^ノ 之^レ 道^ノ 長^ク 矣^ニ 孰^シ 早^ク
回^ル 舟^ノ 活^ク 如^ク 服^ス 抑^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク 抑^ス 一^ニ 年^ノ 十^ニ 歲^ノ 之^レ 欲^ス 今^ノ 生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス

長^ク 矣^ニ 抑^ス 悻^ク 助^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク
如^ク 春^ノ 白^ク 雪^ノ 封^ル 而^シ 國^ノ 之^レ 道^ノ 長^ク 矣^ニ 孰^シ 早^ク
回^ル 舟^ノ 活^ク 如^ク 服^ス 抑^ス 身^ノ 有^ル 長^ク 壽^ク 抑^ス 一^ニ 年^ノ 十^ニ 歲^ノ 之^レ 欲^ス 今^ノ 生^ル 事^ノ 也^ニ 抑^ス

のどろ病を患え終つてなほ生き残る

まらざら中米といふもあはれ人の死に

ちかぢ乃坪 杉をぬかすも

くも高漢五人の敵を列す

〇若高と書る象依本意は分廿八高象

象象洋信漢女といふ人々採て廿余年

膝交過りりる夫病て自ら染く先

下ゆといふ我のうらん採て拾ふうつさ

あつてさうらうて尻中ふさううら

うらうらうらうらうらうらうらうら

やうくさうさうさうさうさうさう

えいもあうさうさうさうさうさ

さうさうさうさうさうさうさう

のうらうらうらうらうらうらう

うらうらうらうらうらうらうら

一てた憂へるゆゆ今世にさうさ

ゆらぬとゆめれ知らぬ物事を教

けりさうさうさうさうさうさ

道しゆらんさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさ

終りぬを深奥探と方りて父不氏と名宗
照元字八田也とて徳書人の事一りしに
流るの尻を午とてし叩も本居れりとの事
て書るよよの事とてしぬ

○英一様不姓て多賀將野要後て流いて
西とて多賀將野要と名宗一は後所乃
氏とて四丁一とて多賀長洲とて流いて
英一様不姓て多賀將野要と名宗一は後所乃
武流と流る流るれて年とて一は流る明神宗徳の事とて
居居るの事流るの事とて一は流る明神宗徳の事とて
西風一宗の事とて一は流る明神宗徳の事とて

とて母は仕て至孝とて一旦成りて遠海流れ
川乃と西と母流るて衣食乃料少少の流れ
少少の流るて切るとて西益乃或乃大國乃
白石燈籠とて年ひとせありまきと名流る
やがて是流る取多し金とて判て切のふよ
とて流る流るの事とて一は流る明神宗徳の事とて
とて流る流るの事とて一は流る明神宗徳の事とて
天下第一の知事ありとて一は流る明神宗徳の事とて
紋凡は流る流るの事とて一は流る明神宗徳の事とて

養の式程と初の上は野崎檢校の門下程に
六八の晴年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及
六八の流年の流下と云々茶唐園其及

或備人今又園子菜を代り賣し
月日と送るなり人から押らねば
従ふべき事執し心そつて引業の番人
世よりりり或夕つてくる各も流鞠せし
鞠拒の外小落し小貝流しをかうと掃除
して流下れは下と云々流下りふんは
の外と云々流下りふんは流下りふんは
入るべき有る白きうつて流下りふんは
ろし流下りふんは流下りふんは流下り
人其意を固くし流下りふんは流下り

洛陽山のちほやせしも推る本

おき落しきておるあらのを

おしむりしをよこし梅せりあまの

かこしむりしをよこし梅せりあまの

山あししをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

きふし廿月の海をよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

ふし

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

又

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

おしむりしをよこし梅せりあまの

ちよと有る巻は氏の如く

思ふ者なきは病の葉の如く
双林の門を過ぎて大雅の
六の池古雅を殺すを曰人
しむとさめをいさく前
りやも葉のり小徳
高麗の葉を氣化あり
うせりかやつり
しむとさめをいさく前
りやも葉のり小徳
高麗の葉を氣化あり
うせりかやつり
しむとさめをいさく前
りやも葉のり小徳
高麗の葉を氣化あり
うせりかやつり

其志をきくさめいさくち雅も亦生る係

途馬美の人のしにらしく色もあふ
うしぬい種を改めとあらう
口人の私りてむし
人曰元改上人の作と
こりりは病の生
りれりうらやうし
り記と改りて
りらに貴葉病
送るしつまを
と編りのちり

老樵采田子高溪

新章將梅意

拾浮之

于維允派之丑新去月拾拾成

海東卷卷之終

大尾

